



# ピッポ新聞

2004  
10  
No. 192

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500円  
編集・発行 伊藤俊男

## ピッポ

〒424-0886 静岡市清水草薙1-6-3  
TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>  
Email [pippo@diana.dti.ne.jp](mailto:pippo@diana.dti.ne.jp)

大型絵本について考えてみる  
その7

福音館書店の書籍編集部長の大和さんから9月号に続いてお返事をいただきましたので、先ずこれを掲載いたします。

子どもの本専門店ピッポ 伊藤俊男様

初秋の候、朝晩涼しくなり、桜の葉の落葉が目立って増え、秋めいてきました。

さて、ピッポ新聞6月号、9月号で小社としての返答をさせていただきましたが、さらに、ピッポ新聞9月号で質問をされていますので、答えさせていただきます。

「絵本の大型化は本来その絵本がもっている良さや、イメージを損なわないか? その絵本の質を変えてしまわないか」

「既に評価の定まっている普通サイズの絵本を大型にしても、何故その絵本の質(芸術性・文学性・子どもの受ける大型と原本の印象と質の違いなど)が変わらないと考えるのか」ということについてですが、――

小社としては、作品の選定にあたって、大型化されても作品世界全体のイメージがそこな

われず、大型化により背景の広がりや奥ゆきが増し、細部の書き込みをより楽しめる作品を選ぶなどの配慮をしています。

ピーターラビットを大型化しませんと申しましたのは、もともと「ミニチュア絵本の宝石」と呼ばれていますように、極めて小さい判型で出版され、主人公の大きさにおいても、背景の広がりにおいても、大型化する絵本ではないと考えるからです。

子どもたちは従来の絵本に比べ、大型絵本から違った印象を受けるといことはあると思います。単に画面が大型であるということだけでも強い印象を受けることでしょう。しかし、それは質の問題とは別のことだと考えています。

大型絵本は園の行事や図書館で大勢の子どもたちに読み聞かせられることを想定したものです。大型絵本と通常の絵本とは、用途や役割は別のものだと申し上げたのはそのためです。大型絵本に「こどものとも劇場」というシリーズ名を付けたのは、その用途の違いを表すためでもあります。

次に「どの作品のどの部分がどう迫力と奥ゆきがありましたかを具体的に教えて欲しい」とのことですが、――

私は先のお手紙で「比べて見てくださいと申し上げる以外にありません」とお答えしました。元の絵をそのまま拡大しますと、画面が荒れた平面的な印象を受けることになり、絵本の世界を壊すことにもなります。小社の場合、あるも

のは原画から新規に製版をやり直して大型化し、あるものは最新の技術で製版データを再処理するなどして印刷しています。ですから大型化した時、絵の広がりや奥ゆきは増していると考えています。また、元の絵本と比較し、イメージが損なわれ違和感をいだかれることはないとも思っています。

しかしそれは、何ページのどの部分かどのようにと、定量分析的に言えることではありませんので、実際の作品で見比べていただきたいと思っております。

次に、二次的使用に関するご意見についてですが、――

小社には絵本の二次的使用についてのお問い合わせが、日々相当数寄せられています。読み聞かせをする団体からのお問い合わせもたくさんあります。

「ベープサート」「パネルシアター」「エプロンシアター」「絵本の紙芝居化」「OHPを使用しての朗読(OHPとは光を当ててスクリーンに投射して使用するものです)」「パワーポイント(パソコンに画像を取り込んでスクリーンに投射するものです)」「絵本をスライドにする」など、さまざまなお問い合わせがあります。

これらすべての場合、著者に無断で製作すると著作権法、特に著作者人格権、同一性保持権に抵触します。ボランティア団体が非営利にするのであっても例外ではありません。

様々な二次的使用に関するお問い合わせの中に「拡大絵本」を作りたいというご要望も多くあります。

製作方法には自分たちで手作りの大きな絵を描いている団体と、作品をカラーコピーで拡大する団体があります。いずれの場合も、著作権者に許諾確認を行なう必要があります。著作権者へのこういったご連絡は、トータルで年間数百件になります。

以前に書かせていただきましたが、これらの読者・団体からの要望を受けられた著者の方々から「元の絵を生かした絵本の大型化の企画を福音館で考えてくれないか」とのご希望もありました。画家が、自らの絵を、読者の手による模写やカラーコピーで製作されるより、品質を維持した形で制作してほしいというご希望は、私どもはよく理解できます。

また、それ以前にも、弱視の子どものいる施設の方から、絵本の大型化に対してのご要望が寄せられ、それも小社として大型絵本の出版を検討する契機になりました。

ピッポ新聞8月号で「弱視者のため」を声高に叫ぶことはいかがなものでしょう?と書かれています。小社として声高に叫んでいるわけではなく、大型絵本刊行の背景事情をご説明するために申し上げたことです。

「大型絵本が保育の現場にほしいなどという保育者は、日常的に子どもに『読み聞かせ』などあまりやっていないからこそいえることだと思います」というご意見には、――

幼稚園保育園の先生方は、保護者の方々に家庭で子どもへの読み聞かせをしてほしいと願っていても、それを理解してくれる親が減ってきている中、それをいかに変えていくかに苦慮し、努力されています。

たとえば、園での保護者と子どもたちを交えた会で、先生が絵本を使って子どもと親に読み聞かせを行ない、子どもたちの楽しそうな表情や絵本に集中している姿を親に見てもらおうとすることがあります。

親も子どもと一緒に絵本を楽しむことで、絵本の楽しさや大切さを理解してほしいという考えからです。

これをきっかけに、親が子どもに絵本の読み聞かせをするようになったということ、たびたび聞かされています。また、家庭で読み聞かせの経験の無かった子どもも、絵本を多くの子どもたちと楽しむことで、興味を持つようになることもあるようです。こうした場面で、大型絵本が活用されたいと願うのです。

もちろん、大型絵本とは別に子どもたちに絵本の楽しさを伝えようと、保育室の図書コーナーを充実させることに心をくだいていらつしやる先生方はたくさんいらつしやいます。

最後にピッポ新聞7月号で紹介されている小泉さん、川口さんのご意見に対してですが、お二人の文章は、体験にもとづく貴重なご意見として読ませていただきました。大型絵本を必要とせず保育や読み聞かせができていくことは何よりと申し上げます。

大型絵本は必要ないというご意見に、それでも大型絵本を読んであげてくださいとすすめるつもりはありません。必要とする方にはご利用くださいと申しあげているのです。

ただ、お二人と同じように経験豊かで、子どもたちの日々の成長を心から喜び、絵本とは何かも十分に理解され、毎日毎日子どもたちに絵本を読んであげていて、保育室にはいつもさまざまな絵本を用意されている先生のなかにも、大型絵本を支持してくださいる方がたくさんおられます。

大型絵本は、子どもたちに絵本の楽しさを伝える入り口のな役割の一面もあるものとして捉えていただきたいと、再度申し上げます。

大型絵本について考え方やとらえ方の違いはそれぞれにあるでしょうが、小社としての考えはこれまで何度か述べさせていたのだいたとおりでございます。

これから秋が駆け足で過ぎていきます。どうぞご愛ください。

2004・10・1

福音館書店書籍編集部長 大和茂夫

## 山里からの便り

佐久間雅哉

### 小さな訪問者たち

山の木が店じまいを始めました。秋と言えば虫の声。虫と言えば、かわいいのやら、迷惑なのやら今年もいろいろやってきました。そこで、我が家のちいさな訪問者たちを紹介しましょう。

下高下の田植えが始まれば、それが我が家へのちいさなお客様の訪問ラッシュの始まりです。代掻きで田の水がはられると、たちまちカエルの大合唱です。

「ホレ！佐久間んちへみんなで行かざア」と歌っているのでしょうか。アマガエルが茶棚の下に逃げ込みますが、でも残念ワタボコリまみれになってつまみ出されます。

何を思っただか、シマヘビが私の靴のとなりに鎮座まし、土間には八工柱が立ち、出入りのたびに迷惑千万。猫を飼う前まではツバメが毎年客間に巣作りしてしまい、出入りのたびに鉢合わせ。これはほほえましくて楽しみでしたが、ハエではね。

隣の栗林からは、クスサンの幼虫が我が家へ繭づくりをやってきました。隣といつても彼らには大旅行だと思っただけです。途中いくらでも繭を作る場所があるというのに、どういいうわけでしょうか。

さて、稲も元気に育って、田の草取りをするのにも穂で目をつつかれて嫌になっちゃ

う頃夏の虫の到来です。ご存知、蚊や蛾、アブ、それをたべようとヤモリ、クモ、アマガエルたちが寄ってきます。

我が家の夏の夕食はなかなかのもですよ。網戸が無く開けっ放しですから蛍光灯にいろんな虫が寄ってくるのですが、蛾が一番困ります。暴れ回るので、鱗粉は落ちるわ、埃はおちてくるわ、挙げ句の果てにご本人はみそ汁のなかへダイビング。

その騒ぎにつられて蛍光灯の裏に住みついてくるクモまで糸を垂らしてお目見えという始末です。さまざまな落下物をよけながら「今までどのくらいの虫をたべてきたのかな」と恐ろしげな会話が出る夕食なのです。

網戸をつければそれで済むことなのに、それをしないできたうちもおかしいんですけどね。

もつとすさまじいのが娘の茅とマダラカマドウマの遭遇です。マダラカマドウマというのは羽の無いバツタで、日本固有種だそうです。洞窟などに住むだけあって、ジメジメしたところが好きで、台所や風呂場に現れます。後ろ足が異様に長くすごい跳躍力をもっています。

わたしは造形的に気に入っているのですが、娘の茅にとっては天敵です。茅が風呂場から逃げるときは、決まってこれが出現した時です。それこそ大騒ぎ、ぎゃーぎゃー言いながら私を呼びにくるので、何かとこちらがビクビクしてしまいます。

我が家ではわたしが虫取り係です。女房もムカデが出ると茅ほどではないにしろ

「おとうさん。おとうさん」と呼びつけます。ムカデじゃしよがないが、アブやセミでよびつけられた日にゃ「オマエらしい加減で慣れるよな」と言うのですが駄目なものは駄目ですよな。

茅、せめてタオルぐらい巻いて逃げてきな。

こうして大騒ぎの夏も終わりに近づき、下高下では早ばやと稲刈りがはじまる九月上旬、コオロギやウマオイなどの出番となるのですが、カマキリも目立つのです。

ある年、腹がプリプリの大きなカマキリを見つけたので、背中に「直次郎」と書いてやったことがあります。直次郎君どうやら台所付近をテリトリーにしているようで、アブを食べている姿をよく見かけました。

しばらくして姿を消してしまいましたが、なにやらペットみたいでかわいかったです。

わたしが一目置いているものもいます。この辺りではオニグモと呼ばれているアシダカグモという大型のクモです。天井や壁で見るとは多いですね。

クモは益虫といわれながらも嫌われてしまふのはその姿と巣を張るからでしょう。

うちでもクモの巣は困りものです。これだけ虫がはいりこむ家だからしょうがないけど、いくら取り除いてもきりがありません。あちこちクモの巣だらけの家です。

そんなクモの中でこのオニグモは巣を張らないタイプなのです。巣を張らずに虫を捕ってくる、特にゴキブリが好物のようで、我が家にゴキブリが居ないのはかれのおかげと思うとありがたい存在です。

なんか尊重しても良いかなあと考えて、「お館様」と呼んでいます。「千と千尋の神隠し」の釜爺みたいなやつです。

カマキリ、ジヨロウグモが太り出すと、我が家の小さな訪問者たちも減ってきて、雪虫が舞うのを最後に冬となるのです。

ちなみにヒメネズミとクマネズミを紹介しなかったのは、彼らは訪問者でなく居候だからでした。



このアマガエル一輪車を使っても奥に入り込んで離れないのです。仕事場の手すりに居着いている一匹もそこから動かないのです。面白いものです。

福音館書店書籍編集部長 大和茂夫様

十月に入ってから空気の变化は、いよいよ秋本番を感じさせるものになりました。田舎に暮らしていますと秋は楽しみの季節でもあります。先日も開店前に近所の山へ出かけて、クリを拾ったり、アケビを採ったりと秋を遊んでいます。

大和さん、前回の質問のお返事をいただきありがとうございます。いままで3回にわたってこちらの質問にお答えいただいたことにあらためて感謝いたします。

最初に「大型絵本について」質問をしたのがピツポ新聞4月号でした。

はいいもので、いつの間にか季節は春から夏、そして秋へと移っています。大和さんからお返事をいただく度に、期待を抱いて、それを読ませていただきました。

しかし、その回答内容は、こちらの期待とはどこかちよつと違つ感じを抱きました。

もちろん前回も申しましたが、こちらの意見と異なるから期待はずれと言うことではありません。その内容が、こちらのお聞きしたいことと少しずれていっているのです。

ぼくがお聞きしたいのは、既存の絵本を大型化することで、読者が本来その絵本から得ていた同じ情報を、大型絵本からも得ることができるのですか（大型化による絵本の質の変化の有無）？という疑問に対する回答なのです。

言いかえて、繰り返しますと、ある絵本

を数倍に拡大した場合、元の絵本と拡大された絵本とは、そこから読者が得る情報は、元の絵本と何ら質的に変わらないものなんでしょうか、ましてや、子どもたちへの「読み聞かせ」という場において、という疑問なのです。

ぼくは、描かれている物や人物・背景などの大きさがちがうということは、同じ場面を見比べた場合、読者の感じる印象は違うのが当然だと思います。絵本は一枚のタブローとは違い、流れをもった物語全体が絵本なのです。ですから、大きさによって受ける印象の違いは、子どもたちは想像力を駆使して読むことを含めて、とても大切なことだと思えます。ですから、絵本というものを論ずる場合は、このちがいは大きな問題だというのがぼくの考えなのです。

これが饅頭の話であつたら、ぼくも5センチの饅頭より20センチの饅頭に手を挙げるときもいれませんが、問題にしているのは、芸術や文学の話なのです。安易に大きくしてしまつては困るのです。饅頭だつて、大ききよりも、中のあるこの味を問題にする人のほうが多いかも知れません。

その上に、大和さんは「大型化した時、絵の広がりや奥ゆきは増し、細部の書き込みがより楽しめると考えています。」とおっしゃっています。

饅頭でいえば、饅頭を大きくすれば、中のあるままでおいしくなると言っていることなのですが、はたしてそうでしょうか？ それだったら、「こどものとも」のシリーズばかりでなく、翻訳の絵本にも大和さん

の目に適う絵本もありませんから、もつとどんだん大型絵本を福音館は出せばよいのです。「ピーターラビット」は適さないということだそうですが、「いたずらきかんしゃちゅうちゅう」などはいかがですか。

今回の回答の中で大和さんは、ぼくの「どの作品のどの部分が迫力を増し・・・具体的に教えてほしい」という質問に対して、「何ページのどの部分がどのように」と、定量的に言えることではありませんので、実際の作品で見比べていただきたいと思います。思っております」とおっしゃっていますが、ぼくが求めたのは大和さんがおっしゃる「定量的分析的」の前に、「定性分析的」(ものごとの「性質」の本質的分析)をこそ望んでいたのですが・・・。

二次的使用について、法律論を持ち出して説明していただきましたが、ぼくはこの説明から、福音館は何だか裁判官になって読者にもものを言っているように感じました。読者が、絵本を二次的使用することは、すべて悪いことだと、言っているように聞こえます。

個々のケースによつては、使用の有無を含めてそれぞれが対応があつて良いのではないのでしょうか。著者の中には小教ですが「子どものためになるなら自由に使っていたらいい」と結構です。(使用する状況による)という方もいらつしやいますよ。

著作権問題はおっしゃる通りに簡単なことではないと思います。いまや一部では公

共図書館でベストセラーを貸し出すことに對して、図書館は本代金以外に著者にいくらかの使用料(?)を支払えという意見もあるのですから・・・。

大和さん、終わりのところで「読み聞かせ」や保育者や保護者について触れていますが、少し気になることがあります。

「幼稚園保育園の先生方は、保護者のかたがたに家庭でも読み聞かせをしてほしいと願つていても、それを理解してくれる親が減つている中、それをいかに変えていくか苦慮し、努力しております・・・」と書いてあることです。

本当に「読み聞かせ」の大切さを理解している親は減つているのでしょうか？ ぼくはこれとはまったく逆な認識を持つています。今ほど「読み聞かせ」や子どもの読書にたいして関心が高まつたことは無かつたと思えます。

このことが良いか悪いかは別に、小学校や中学に親の「読み聞かせ」ボランティアが入つていきますし、「朝読」などというものも盛んに実施されています。数年前には考えられなかつたことです。「読み聞かせ」は今や全国的なブームにさえなつていりてありませんか。このブームを背景に福音館でも読み聞かせ用と名打つて大型絵本を売り出したじゃありませんか。

小泉さんや川口さんの意見に對する大和さんの見解についてですが、「大型絵本を必要とせず保育や読み聞かせができてい

ことは何よりと申し上げます」とお書きですが、大和さんの弁を借りれば「読み聞かせ」用という目的をもって出版された大型絵本は、いまや「読み聞かせ」のための必要不可欠なアイテムということになるようですね。

ちなみに川口さんの場合は毎月一回お母さん達との絵本の勉強会のおり、必ず従来絵本で読み聞かせをやっていましたよ。

大和さんは第一回目の回答の中で「読み聞かせ」について、こう書いておられました。

「絵本は、身近なおとなが子どもを膝の上に抱いて読んであげたり、子どもの傍らで読んであげたりすることを基本と考えております」

これと今回のお返事の内容との間に大きな落差を感じるのはばくだけでしょうか。

大和さんの「読み聞かせ」に対する主張が短い間に変化してしまったように、大和さんの主張を百歩譲って、子どもたちが絵本と親しむ機会として大型絵本で「読み聞かせ」を幼稚園保育園が始めた場合、「読み聞かせ」というものが変質してしまわないかと、ばくは真剣に危惧しています。

大和さん、当店には名作児童文学の翻案ものは置いてありません。福音館の古典童話シリーズや岩波少年文庫や偕成社文庫の完訳の名作のみを置くようにしています。それは子どもたちに本物の文学を手渡した

いからです。同じように、子どもたちへの「読み聞かせ」もほんものの絵本でやってあげたいと思っています。ですから、大和さんの最初の「読み聞かせ」に対するお考えをばくは支持したいのです。

「絵本は、身近なおとなが子どもを膝の上に抱いて読んであげたり、子どもの傍らで読んであげたりすることを基本と考えております」

ところで、さきごろ集英社から「モンテロッソのピンクの壁」(江国香織・文 荒井良二・絵)という文庫が出たのをご存知ですか。これはもとはほるぷ出版からA4変形版として出ていたのですが、このほど文庫として再版されました。荒井さんは文庫版として出すにあたって、ある場面の絵はこれまでの絵を分割して構成を変え、新たな絵も描き加えました。

直接伺ったわけではありませんが、荒井さんとしては版型が小さくなつたのですから、既存の絵本の構成を変えたり、絵を描き加えることなどは、絵本作家として自然なことだつたのだと思います。読んでみて、新しい絵本として生まれ変わりに成功したようで、とても新鮮な感じがしました。読者としては納得がいきました。ばくは福音館の大型絵本との姿勢の違いを思わざるをえませんでした。

さて、最後になりましたが、3回にわたつ

てお返事をいただき本当にありがとうございました。

最初にも申しましたが、お答えの内容に納得出来たわけではありません。回を重ねるごとに大和さんの福音館のやることには間違いがないという態度にはいささかあきれました。新しいことをやる場合にはプラスの面とマイナスの面があることを認識した上でことに当たるのが普通ではないでしょうか。自戒の意味を込めてそう思います。

そうそう、これを読んでくれたお客さんから一回目のお返事の文章と二回目の文章の文体がちがっているようだが、大和さんが二人いるのだろうか?と、問うてきたこともつけ加えておきます。

季節の変わり目です、どうかお体を大切になさって下さい。

ピッポ 伊藤俊男

## インフォメーション

\* 長らく「大型絵本について」をお読みいただきありがとうございます。次号からこの論争の総括を予定しています。

\* 新刊や、来年度カレンダーなど紹介やお知らせがたくさんありますが、11月号に回します。次号は少し早目に発行します。

\* 今月も「ばあやのおはなしかご」はおやすみです。次回は12月12日(土)クリスマスお話を予定しています。